

ひょうごの遺跡

平成19年
1月30日発行

62号

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2-1-5 TEL 078(531)7011 FAX 078(531)7014

ホームページアドレス <http://www.hyogo-c.ed.jp/~maibun-bo/>



井手田遺跡の
竪穴住居跡

松菊里型住居を伴う集落を発見

弥生時代の始まりの時期に、西日本一帯に特徴的に現れる住居形態があります。屋内土坑の両側に2対1セットの柱穴を持つ構造の「松菊里型住居」です。朝鮮半島より、早期から前期初頭にかけて伝わった住居形態が、中期にかけて日本で独自の形態に変容されたとすれば、各地域への弥生文化伝播の系譜を探る糸口ともなりそうです。

井手田遺跡では、前期後葉から中期中葉に至る各時期の松菊里型住居が確認されています。中でも前期末の松菊里型住居は平面形が方形で、2柱穴が屋内土坑の中の両端に収まる「休岩里タイプ」と呼ばれる大変珍しい構造でした。このタイプは朝鮮半島西部に多く認められますが、日本ではご



(上) 休岩里タイプの屋内土坑をもつ前期末の方形住居跡
(下) 屋内土坑からは大量のサヌカイト剥片やチップが。



検丹里タイプの屋内土坑と柱穴



中間タイプの柱穴から出土した波状口縁の甕

く少数派です。九州に10数例ある他は、高知県と愛媛県で1例ずつ確認されているのみです。

この屋内土坑に埋まっていた土を洗ってみると、石鏃の製作途中品や石錐、サヌカイトの剥片の他500点以上ものチップ（0.5mmから3mm大のサヌカイトのかげら）が含まれていました。これらはサヌカイトの原石から得た剥片を、鹿角などで薄く剥がす（押圧剥離）作業で石鏃や石錐を作る際に生じたものでしょう。つまり、屋内土坑はちょうど鉛筆を削る時のゴミ箱のような役割、住居は石器作りの工房だった可能性が考えられます。この松菊里型住居の床面には敲打具（たたき石）や台石も置かれていました。

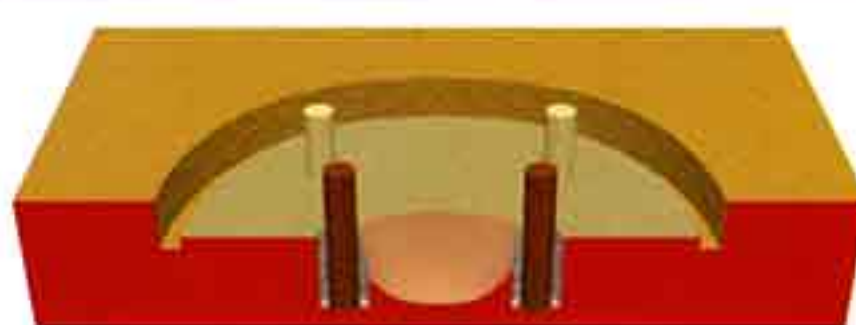
この他の松菊里型住居は「検丹里タイプ」と「中間タイプ」でした。このうち前期後葉の中間タイプの柱穴からは、四国東部に特徴的な波状口縁の甕がほぼ完全な形で出土しました。

韓国に源流が認められる松菊里型住居 — 屋内土坑のいろいろ —



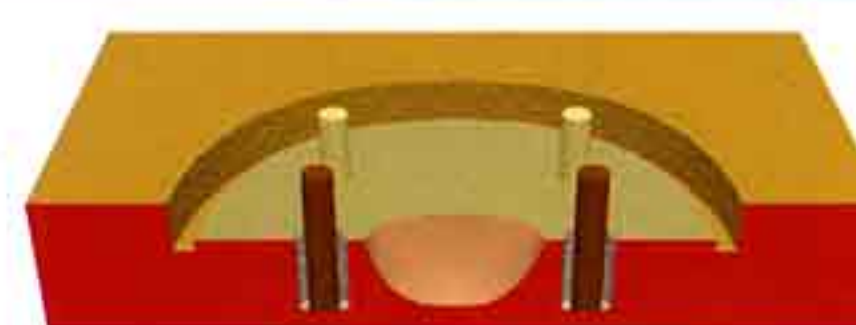
休岩里タイプ

2本の柱穴が屋内土坑の内側に配置される。朝鮮半島西部（忠清南道・全羅南道）に多い。



中間タイプ

2本の柱穴が屋内土坑の両端に接するか、つながって配置される。



検丹里タイプ

2本の柱穴が屋内土坑から離して配置される。朝鮮半島東部（慶尚北道・慶尚南道）に多い。

弥生時代前半期の住宅事情

淡路島では、これまで弥生時代前期のはっきりと残った竪穴住居跡は見つかっていませんでした。九蔵遺跡と井手田遺跡の調査で初めて、床や壁が残っていて、平面形のわかる竪穴住居跡が確認されたのです。前期から中期にかけての構造の変化もわかりました。

井手田遺跡の前期の竪穴住居跡の特徴は、中期以降のものに比べるとやや小さめで、床の周囲をめぐる周壁溝は設けられず、壁と床との境は不明瞭で、壁は床から斜めに立ち上がります。ここではすべて方形で、前記した松菊里型住居は若干小さめの3.8m×3.4mですが、一辺5m前後の隅丸方形が主体であるようです。九蔵遺跡では円形に近く、直径は約5.2mです。この住居跡は床の中央に炉と考えられる土坑があり、井手田遺跡の方形住居跡の炉は中央から偏った位置にありました。

次に、井手田遺跡の中期前葉の竪穴住居跡では、円形に近い平面形になり、よく見ると丸みをおびた四角形のようにも見えます。屋内土坑が中心に位置し（中央土坑）、周壁溝もしっかりと設けられます。この竪穴住居跡の特徴は、中央土坑が深さ57cmと非常に深いこと、6本の支柱穴を持つこと、中央土坑の周囲に焼土や灰などを掻き出した土手状の盛り上がりが存在することが挙げられ、



無数の竪穴住居跡の切り合い

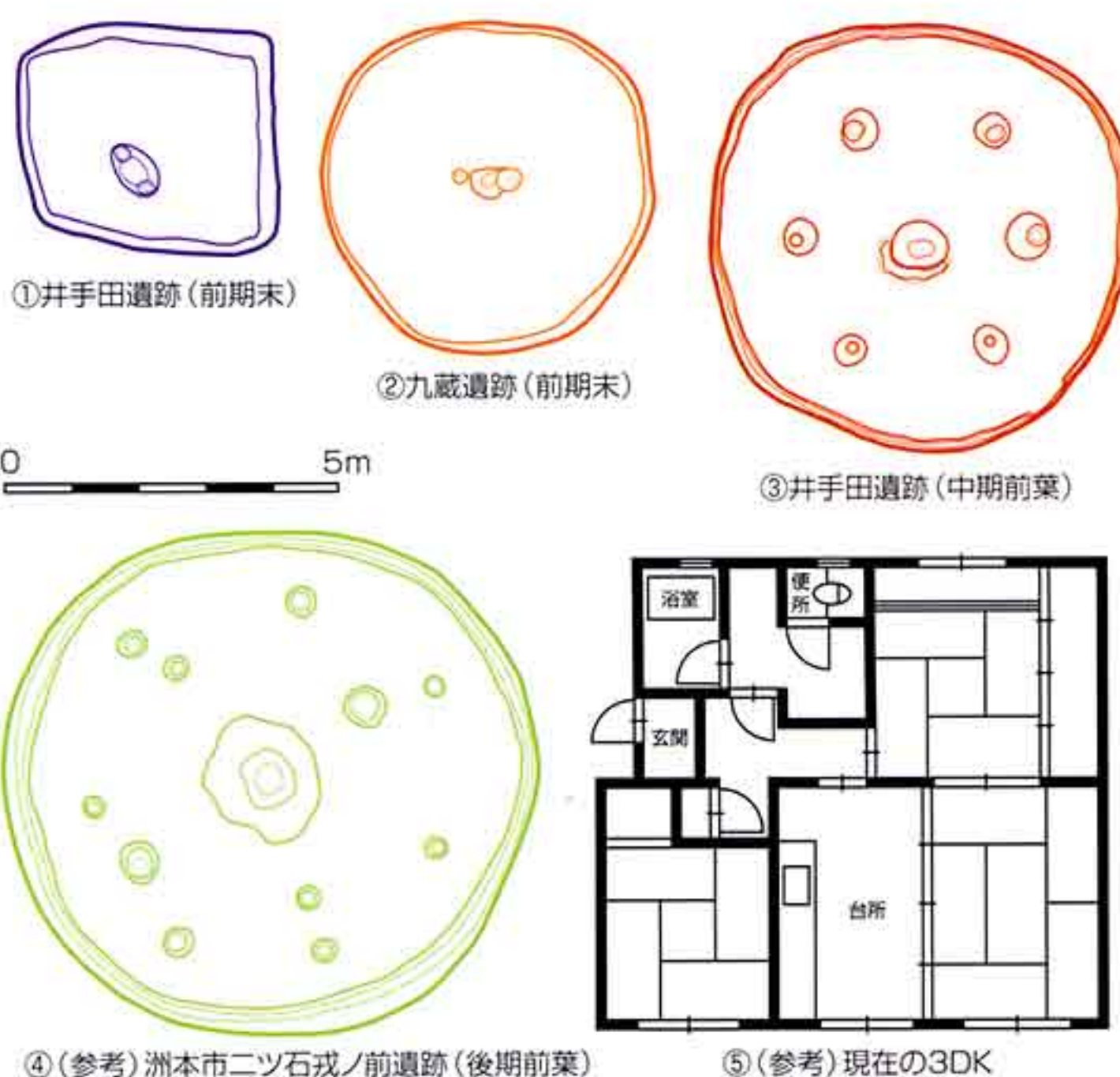


前期末から中期前葉の居住域の様子

構造の完成度は中期後葉から後期のものと比べても遜色はありません。この後、後期にかけて床面積はさらに大きなものが現れ、現在の住居と比べても案外大きいことがわかります。井手田遺跡の中期前葉の住居跡も、現在の台所や風呂・トイレのスペースを除けば、広さはあまり変わらないのかもしれませんが。

井手田遺跡では、中期前葉から中葉にかけて無数の周壁溝が切り合って、竪穴住居跡がひしめいている状況が見られます。このような状況は弥生時代中期でも後葉段階に人口増加による住居の建替えの好例として他遺跡でも紹介されるのですが、井手田遺跡では中期の早い段階から見られるのです。さらに、前期末から中期初頭の方角住居でも少しずらした切り合いが多く見られます。しかし、前期から中期初頭の頻繁な建替えは他では聞いたことがありません。なお、前期から中期初頭にかけて円形住居が見られず方形住居が主体となるのも大変珍しいことです。

淡路島の弥生時代の竪穴住居跡と現代の住居



井手田遺跡の墳墓と
水田、出土遺物

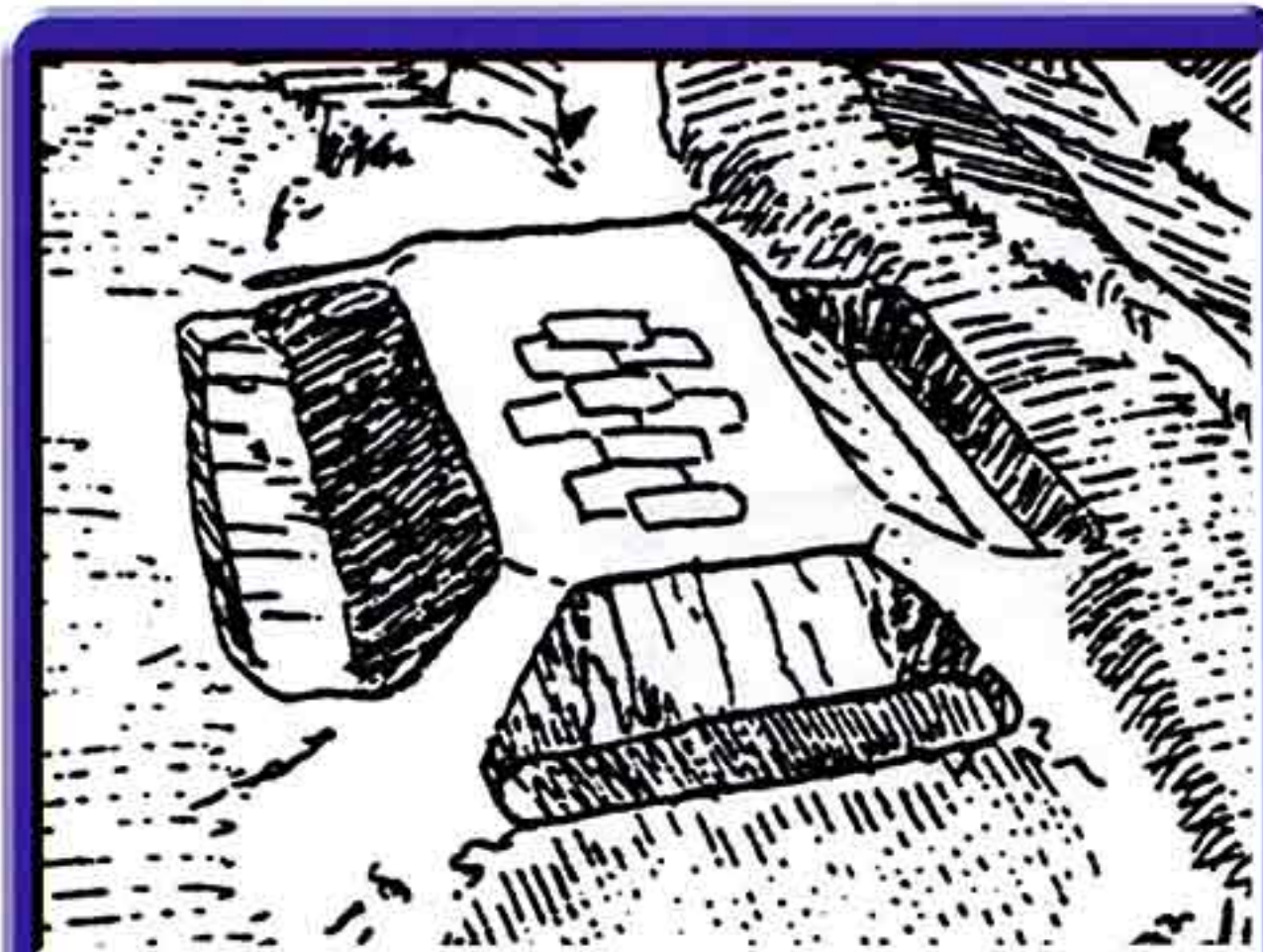
周囲に溝を掘りめぐらせたお墓

井手田遺跡では、中期後葉（約2,000年前）の方形周溝墓が確認されています。その名の通り、四角い盛土の周りに溝を掘りめぐらしているお墓なのですが、どれも四隅（角）が掘り残されて全周しません。本来は盛土の中央付近に埋葬施設（主体部）の木棺墓があったと思われますが、後世に盛土の上部が削られているために残っていませんでした。溝の中からは壺を中心とした土器が多数出土し、割れてはいるものの完全な形に復元できそうなものばかりです。

南あわじ市の淳仁天皇陵に程近い神子曾（みこそ）遺跡や三原平野中央部の幡多（はた）遺跡でも、四隅が途切れる方形周溝墓が主流です。このような特徴を持つ方形周溝墓は淡路島南部ではよく見られるのですが、実は徳島地方の方形周溝墓にも共通する特徴なのです。

興味深いことに、淡路島中央部の洲本市下加茂遺跡でも中期前葉の四隅が途切れる方形周溝墓が確認されましたが、ここでは中期後葉には円形周溝墓のみに変わっていきます。一方、神子曾遺跡の周溝墓には中期前葉から円形と方形の両者があり、少なくとも四隅が途切れる方形周溝墓は中期後葉まで存続しています。

神子曾遺跡の円形周溝墓には、幸運にも主体部が残存しているものがあり、木棺墓が中央に1基ないしは中央を挟んで2基並んで配置されています。復元図で紹介した徳島市庄・蔵本遺跡の中期末の方形周溝墓には、なんと19基を越える埋葬施設が確認されています。



四隅の途切れる方形周溝墓の復元図
（「徳島市庄・蔵本遺跡95年度発掘調査現地説明会資料」より）



洲本市下加茂遺跡の方形周溝墓



南あわじ市神子曾遺跡の周溝墓群



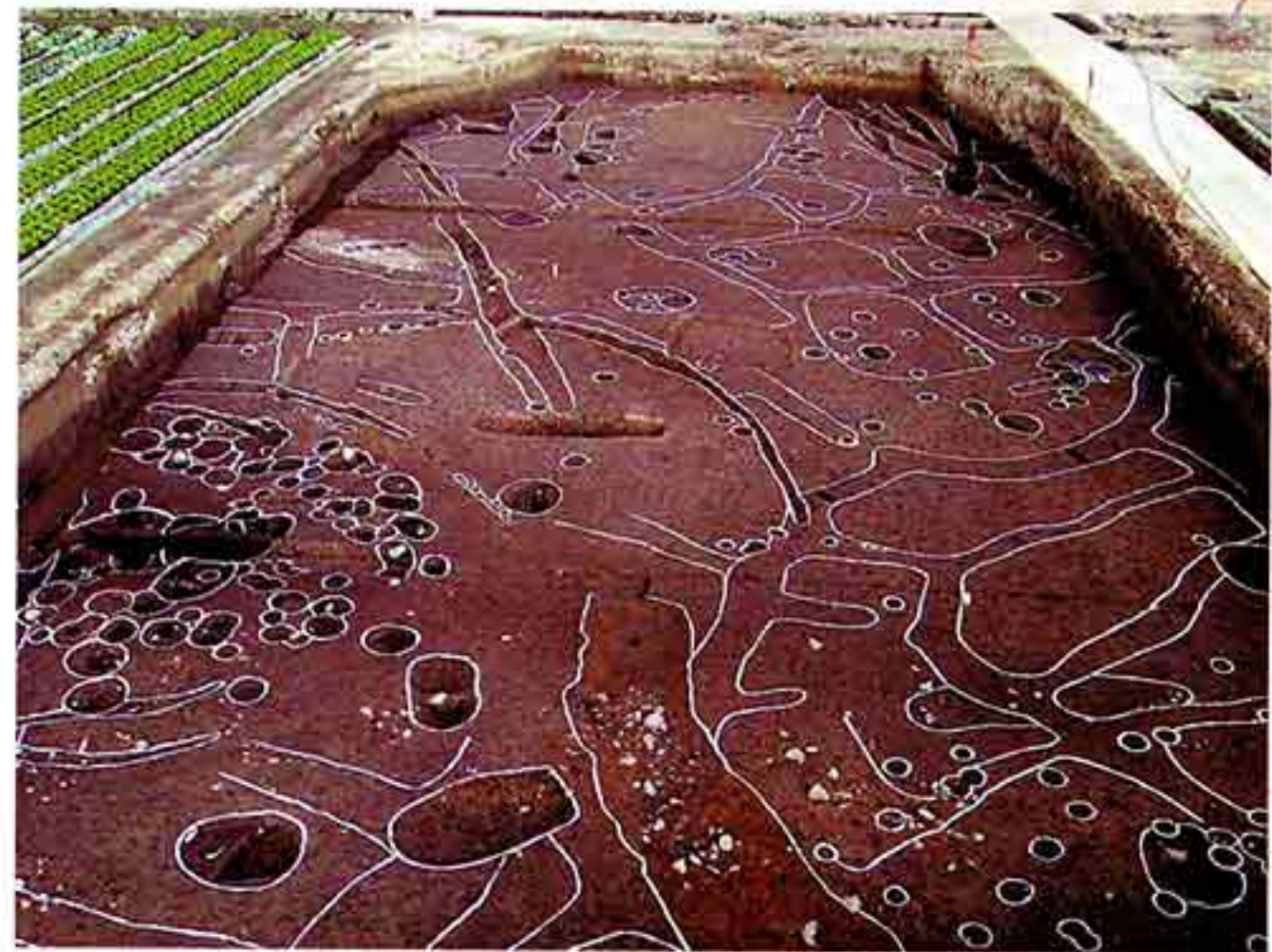
井手田遺跡の方形周溝墓（中期後葉） ※正方形の竪穴住居跡は古墳時代の住居跡

棚田のような小区画水田

淡路島では、弥生時代前期の水田跡が3ヶ所（井手田遺跡と洲本市下加茂遺跡、南あわじ市雨流遺跡）で発見されています。今回の井手田遺跡で発見された水田跡は、棚田のように傾斜に沿って扇形に畦畔がめぐり、さらに放射状に区画していました。水田一筆の面積は $3\text{m}^2 \sim 12\text{m}^2$ とかなり小規模で、いわゆる小区画水田と呼ばれるものです。

このように水田一筆あたりの面積が小さいのは、水を張るために水田の土をできるだけ水平にする必要があるためです。水田一筆の底の高さに10cmの凹凸があれば水田にならないと言われます。ところが、平坦な土地であれば水田の区画を造りやすい反面、傾斜が少ないため用水や排水がスムーズにできません。したがって、灌漑用水を比較的容易に得やすく、かつ必要に応じて排水が可能である緩やかな自然傾斜を持つ地形が選択されたのです。

自然地形の凹凸の少ない地形であれば、短冊形に区画された水田が整然と揃うのですが、井手田遺跡の場合は細かい起伏のある谷地が選ばれたために、扇形の区画が分割される曲線的な棚田状の区画が描かれているのです。



井手田遺跡の棚田のような小区画水田



下加茂遺跡の短冊形に整然と並ぶ小区画水田

出土遺物からみた特徴

井手田遺跡では、他地域との交流を示す遺物が多いのも特徴です。土器では和歌山地方で製作された「紀伊型甕」や、徳島地方で製作された可能性のある甕や壺が出土しています。

石器の素材では、徳島産の結晶片岩（石庖丁や加工用の石斧）や緑色岩（伐採用の石斧）、香川産のサヌカイト（刃器類）や安山岩（たたき石）といった他地域で産出する石材を用いたものが大多数を占めています。特に、石庖丁では徳島地方で出土するものと同じ形態や材質すなわち徳島地方で製作されたもの（①）と、畿内で出土するのと変わらない形態のもの（②）や、②と同質の石材の製作途中品（③）も出土しています。

また、弥生時代前期末以降の出土遺物が中心となる中で、縄文時代からの伝統を引継ぐ石棒が残っているのも興味深い事実です。



①



②



③

井手田遺跡の石庖丁

九蔵遺跡と環濠集落



断面逆台形の土層断面と溝の中の様子

断面逆台形の溝を発見

九蔵遺跡では3ページで紹介した弥生時代前期末の竪穴住居跡のほか、弥生時代前期から中期初頭にかけての溝や土坑も検出されました。確認調査区もあわせて3ヶ所で確認された溝は、本来同一の溝であった可能性が高く、最大で幅1.8m、深さ80cmの断面逆台形をしています。

溝は前期後葉に掘削され、中層からは前期末から中期初頭にかけての多量の土器や石器、さらには細かいサヌカイトのチップも見つかりました。この状況は、生活に伴う痕跡を濃厚に示しており、付近に集落が営まれていたことがうかがえます。

出土した土器には口縁部を逆L字形にした「瀬戸内型甕」が非常に目立ち、徳島産と思われる緑色片岩製の石鎌や、香川県の金山産サヌカイトが多数を占める中で、奈良・大阪府県境の二上山産サヌカイトの大型石核が含まれるといった、様々な地域との交流を示す遺物も見られます。

溝は約36mの範囲を確認したのみですが、

- ①底が地形の傾斜とは逆方向に傾斜すること
 - ②生活の痕跡を示す状況証拠が濃厚であること
 - ③付近に竪穴住居跡が確認されていること
- の3点から生産域の用水路などではなく、集落を区画する溝であった可能性が高いと考えられます。

環濠集落とは

お米作りが始まった弥生時代前期には、地域での開拓や他地域との交易を行う上で中核となる集落が生まれました。さらに、周囲を濠で囲む環濠集落となるものも現れます。

周囲を濠で囲む集落は1万年も前に西アジアで出現し、中国の黄河中流域（現在の西安付近）には約6,000年前に現れます。日本の環濠集落は、韓国の無文土器時代の集落に直接のルーツを求めることができ、代表例に検丹里遺跡（紀元前4～5世紀）があります。

弥生時代の環濠集落は、時期ごとに規模や溝の様子が変わります。前期でも前半段階の環濠集落は面積が4,000m²～6,000m²程度と小規模で、断面V字形の溝が1条めぐります。前期の後半段階になると、面積が6,000m²～30,000m²程度とやや拡大し、溝の断面形もV字形のほかにU字形や逆台形のものが加わり、2条以上めぐる場合が多くなります。中期になると面積が70,000m²～250,000m²程度と飛躍的に拡大し、幅が3mを超える大規模な溝を数条めぐらし、中期後葉まで存続するような長期間継続型の環濠集落が出現します。

前期前半段階の環濠集落：神戸市兵庫区大開遺跡
(神戸市教育委員会提供)前期後半段階の環濠集落：岡山県矢掛町清水谷遺跡
(矢掛町教育委員会提供)

淡路島の環濠集落の候補

淡路島には弥生時代前期に環濠集落が造られたのでしょうか。残念ながらまだ発見されてはいないのです。淡路島である程度の広さがあり、地域の中核となる集落の営まれそうな低地は限られます。候補地は三原平野の入口にあたる三原川の河口付近や洲本市の洲本川下流域、そして南あわじ市阿万付近、ほか淡路市郡家付近も挙げられます。

一方、面積的な広がりとしては狭小な洲本市北部の平安浦（安乎間所遺跡）や淡路市の志筑（天神遺跡）などでも、多量の遺物を出土し集落を区画する可能性のある溝が見つかり、前期後半から末にかけて沿岸の中継地点として集落が設けられた可能性があります。ただし、開拓の拠点としては抱える可耕地が少なかったために、集落規模は発展せず長期間継続しなかったのでしょうか。

九蔵集落の範囲を探る

九蔵遺跡の溝が確実に環濠であったとは限りませんが、ここではあえて積極的に環濠であった可能性に着目して範囲を想定してみましよう。

集落が営まれる場所は、洪水を避けるために微高地が選択されます。等高線を引いて微地形を復



元すると、調査区の南北の浅い谷状の地形に挟まれた微高地であることがわかります。この微高地上に、等高線の形状や現在の田や道路の区画などから細かい起伏を考慮して溝の続きを復元すると、楕円形の長径約90m、短径約70mの範囲の環濠集落を想定できます。



展示会のご案内

いま、全国各地の博物館や資料館で、考古資料を展示する館が増えています。

普及活用班では、当事務所が所蔵する出土品をこうした館へ貸し出す業務も行っています。今年度は例年より多く、すでに100件を超えました。ちなみに、人気の高いのは袴狭遺跡出土品、県指定文化財の線刻画木製品（サケ・カツオ・シュモクザメ等を描いたもの）と人形や馬形の木製祭祀具です。

さて、今回篠山市にある兵庫陶芸美術館で、当事務所所蔵品の新しい時代の焼物『丹波焼』を紹介する特別展『TAMBA STYLE 伝統と実験』が開催されますので、お知らせいたします。

平安時代以降、一貫して日常の焼物を作り続ける丹波の伝統、そして常滑の作家『鯉江良二』が挑む丹波焼、それぞれの“TAMBA STYLE”を通して、丹波焼とは何かを探っています。

また、会期中の土曜日の午後には、《学芸員による》丹波焼ガイドツアーも実施されます。

是非、丹波焼のふるさとをお訪ねください。

問い合わせ先

兵庫陶芸美術館
篠山市今田町上立杭4
TEL 079-597-3961



TAMBA STYLE
Tradition and Experiment

伝統と実験

伝統の丹波焼×陶芸家・鯉江良二の丹波焼。「丹波焼とは何か」を問う。

2007年1月20日(土)～3月4日(日)

※休館日：月曜日(祝日の場合は翌日)2月12日は閉館、2月13日(火)は休館、3月10日(土)～15日(木)は閉館(入館は閉館時刻の30分前まで)
※観覧料：一般800円(700円) 大高生600円(500円) 中学生400円(300円) (1円は、前売券または208以上の入館券が1枚付きます。
主催：兵庫陶芸美術館、神戸新聞社、後援：兵庫県 兵庫県教育委員会、篠山市 篠山市教育委員会、丹波市 丹波市教育委員会
NHK神戸放送局 丹波新聞社 (財)兵庫県芸術文化協会 協力：丹波立杭陶器協同組合
※兵庫県内在住・在学の子供はコロンカード持参で無料になります。※兵庫県内在住の65歳以上の方は半額になります。
※前売券は必ずその旨を記載し郵送してください。※午後5時以降は観覧料が半額になります。 (一般800円、大高生600円、中学生400円)
※前売券はチケットぴあ、ファミリーマート、サークルKサンクス (Pコード687-116) ローンチケット(Lコード58511) で販売しています。

兵庫陶芸美術館
The Museum of Ceramic Art, Hyogo
〒659-2139 篠山市今田町上立杭4 TEL 079-597-3961 FAX 079-597-3962 http://www.tamba.jp



明石城武家屋敷跡水琴窟
丹波焼甕(近世)

編集後記

兵庫県は風土の異なる五つの旧国をもち、私たち県埋文職員は多様な地域の発掘調査を体感することができます。さらに、県境に調査に赴くことも魅力の一つです。今回の九蔵・井手田両遺跡の調査では鳴門から徳島を対岸に見て、徳島や香川・和歌山にルーツを辿れるものを掘り、兵庫県職員でありながら他県の遺跡を掘っているような感覚にすら見舞われました。2,400年前の阿万の弥生集落に住んでいた人々はどのようなアイデンティティを持っていたのでしょうか。(K.U)



文化財愛護シンボルマーク



“こころ豊かな美しい兵庫”をめざして